

いつも心に川がある
堀川まちづくりの企画展

名古屋をつくった堀川と鉄道

瀬戸電堀川駅 陸運と水運の接点

瀬戸電は、中央線に大曾根停車場を誘致する運動がきっかけで生まれた鉄道である。

大曾根に駅を造る条件の一つに、地元で瀬戸との間に交通機関を開設するということが入っていた。このため、明治35年(1902)に「瀬戸自動鉄道株」が設立され、38年4月に瀬戸から矢田まで、翌年3月には大曾根まで鉄道が開通した。最初は蒸気機関を動力とする車輛だったが、電車へきり替えがはかられ、社名も40年1月に「瀬戸電気鉄道株」に変更している。

業績の向上とともに、市内乗り入れが計画された。当時の名古屋の輸送幹線であった堀川まで線路を延ばし、「瀬戸物」と呼ばれ全国的に有名な陶磁器や陶土を、堀川から舟で名古屋港へ、さらに全国や世界へと輸送できるようにするためである。明治44年5月に大曾根から土居下、8月には堀川まで開通し、全国でもめずらしいお堀を走る電車が誕生した。大曾根駅で中央線に、堀川駅で舟運につながるこの電車は、瀬戸や名古屋北部発展の原動力となった。

堀川駅西側の道路を渡れば、そこは堀川である。堀川岸はスロープになっていて、重い荷物の積み卸しがしやすいように物揚場が造られていた。右の写真には昭和初期の様子がよく記録されている。



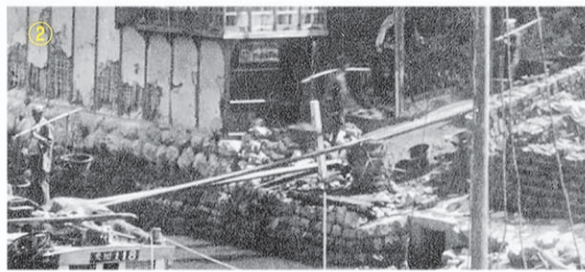
堀川駅 (瀬戸蔵ミュージアム所蔵)



堀川岸の物揚場 (瀬戸蔵ミュージアム所蔵)
丸数字は左の各クローズアップ箇所を示す



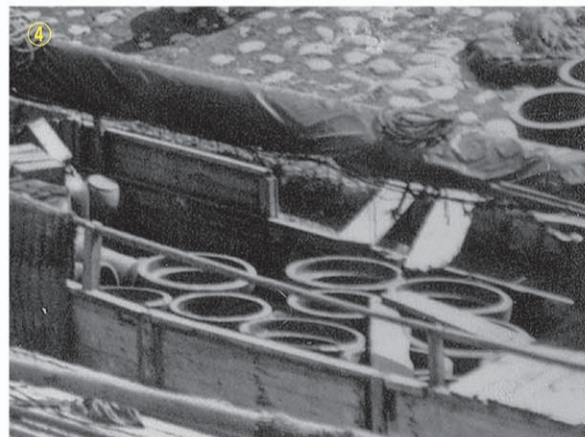
① 石炭らしい荷を積んだ船。右の人は両端に籠をぶら下げた天秤棒を肩にしている。籠に石炭を入れて陸揚げする順番を待っている



② 船から岸へ足場板が渡されている。3人の荷揚作業員が写っているが、中央の人は籠に石炭を入れ、重さでしなった天秤棒を肩に陸揚げをしている。右端の人は空籠で次の荷を取りに船に向かって



③ 堀川岸の荷揚場から堀川駅のホームに斜路が掛けられ、何人も人が行き来している

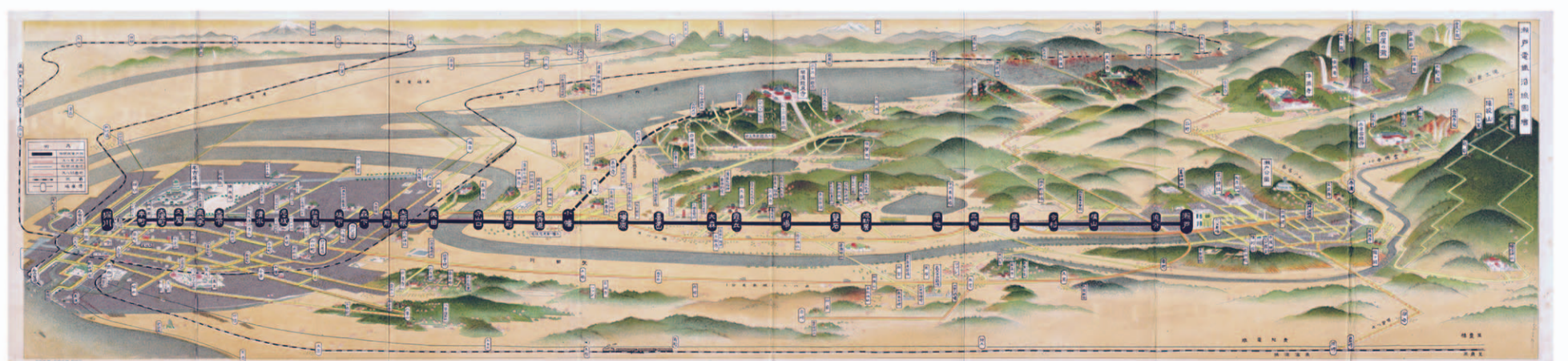


④ 土管を積んだ船。常滑あたりから来たのだろうか。大きな土管なので2枚の足場板が船から岸に掛けられている



⑤ 2人がかりで土管を転がして運んでいる。大きな土管だ。下水の本管にでも使うのだろう。向こうには細い土管と大きな瓶が並べられている。

時代とともにトラック輸送が増え堀川の舟運が衰退したことにより、昭和51年に堀川～土居下間が廃線となって堀川駅はなくなり、53年には栄乗り入れが始まっている。



瀬戸電鉄沿線図 (昭和8年以前発行)